

万次郎とヒコと新島襄

北垣 宗治	同志社大学名誉教授
講師紹介〔きたがき・むねはる〕	

鎖国時代の日本脱出

私はこの京田辺キャンパスで大学の授業が行われるようになってから、二年間こちらに教えに来ました。そして一九九〇年に退職いたしました。それ以来十五年になりますが、このキャンパスが本当に充実してきているを感じている次第です。

今日は「万次郎とヒコと新島襄」というテーマで、お話しさせていただきます。

徳川家康が江戸に幕府を開きましたのは一六〇三年のことですが、十五代将軍の徳川慶喜が大政奉還して、明治天皇の新政府が始まったのが一八六七年でありましたから、徳川幕府はざっと二六〇年間続いたことになります。一六三三年から一六三九年にかけて、徳川幕府はいわゆる鎖国令を出しました。そして日本人の海外渡航と、既に海外に出ていた日本人の帰国を禁止したのであります。これは第一義的には、キリスト教の流入を防ぐためでありました。鎖国のおかげで日本は二世紀半にわたり、戦争を経験することなく平和を楽しむことができました。これは、考えてみれば偉大なことであると思います。それに鎖国は、ある程度まで日本の経済に繁栄をもたらしました。その半面鎖国のために、日本は西洋社会の近代科学の進展から取り残されてしまいました。鎖国は日本にとって、プラスであったかマイナスであったか、これは非常に面白い問題であります。今日はその問題に入ることができませんので、日本の近代史における鎖国については、既定の事実として受け止めることから始めたいと思います。

私は、つい先月伊豆の下田で学会が開かれたのを幸いに、下田に一泊しまして、歴史の町下田をとくと見学してきました。下田港の一隅に弁天島という小島があります。一八五四

年、吉田松陰は、この弁天島の小さなほこらの陰におりまして、夜になるのを待ち、港内に浮かぶペリー艦隊の旗艦ポーハタン号を目指して、小舟を漕ぎ出したのであります。何とか沖合のポーハタン号までたどり着き、自分をアメリカまで連れて行ってくれと、必死になって頼んだのでありますが、ペリー提督はその願いを拒否いたしました。ペリーとしては鎖国している日本の扉を、なんとかしてこじ開けようとしていた時でありますから、日本人をアメリカに連れて行ったりすれば、日本の政府がますます態度を硬化させることは明らかでありました。

吉田松陰の願いをペリーが断ったのは当然であったといえます。松陰は致し方なく岸へ引き返しました。そしてその翌日、下田の奉行所に出頭いたしまして、「私はアメリカの軍艦に乗って、海外へ行こうとしましたが、断られました」と、届け出たのであります。私は松陰のこの途方もない正直さと無邪気さにあきれるのであります。松陰は取調べを受け、出身地である長州の萩に送られ、萩では厳重な監視の下に置かれました。このような状況下で、吉田松陰はあの有名な松下村塾を開き、優れた弟子たちを育成しましたが、その後彼は安政の大獄で捕らえられ、危険人物ということで処刑されてしまいました。まだ二十九歳の若さでした。

アメリカへの脱出に成功した新島

吉田松陰の密航失敗からちょうど十年後にあたる一八六四年に、慎重な計画の下に、北海道の函館から海外への脱出に成功したのが新島襄であります。新島は徳川幕府の定めた厳しい鎖国の掟を敢えて破って、自分自身の決意により、一八六四年に海外脱出に成功した極めて珍しい例です。新島はこの時二十一歳で、どうしても海外の進んだ文明を自分の目で確かめ、経験してみたかったのです。そのため、もし見つければ、死刑になるかもしれないことを覚悟の上で、函館港に停泊していたアメリカの商船を目指して、義侠的な友人の漕いでくれる小舟に乗って岸を離れたのでした。新島は、船までたどり着いてから乗船を断られたりしないように、その友人の斡旋によりまして、あらかじめ船長の下承を取り付けていました。船長は「沖合に停泊している自分の船まで、人に知られないようにこっそりやってくるなら、連れて行ってやろう」と、約束していました。新島襄がアメリカに到着するのは、一八六五年のことで、幸いにして彼の人物を見込んで学資を出してくれるアメリカ人と出会い、幸運にもアメリカの東部で一流の高等学校、大学、大学院で学ぶことができました。彼はアーモスト大学を一八七〇年にBachelor of Scienceの学位を得て卒業しますが、これは日本人として、西洋の大学を正式に卒業した第一号であります。では、新島以前にアメリカで学んだ日本人はいなかったのでしょうか。実は何人かいたのであります。今日はその意味で新島の先輩にあたる二人を取り上げて、新島の場合と比較してみたいと思います。

比較対比してみますと、それぞれの人物の特徴がよくわかります。今日取り上げる二人は、万次郎とヒコであります。この二人は新島と違ってアメリカに行きたくて行ったものではありません。不思議な運命の巡り合わせによって、アメリカに連れて行かれることになったのであります。彼らは日本の近海で嵐に出遭い、遭難した人びとでありました。

遭難した漁師、万次郎の生涯

まず土佐の漁師、万次郎です。彼は四国の足摺岬に近い中の浜というところで、漁師の次男坊として生まれました。漁師でありましたから苗字はありません。一八四一年十四歳の時に、雇われていた漁船に乗り込んで漁に出たのでありますが、大嵐に出くわし、帆柱は折れ、舵は流され、一週間海上を漂い、ようやく一つの無人島にたどり着きました。漁師たち五人は、その無人島で貝や魚やアホウドリを取ったりしながら、なんとか五カ月間生き延びました。ある日アメリカの捕鯨船がその島に立ち寄りまして、五人の日本人漁師たちを見つけ、彼らを救助したのであります。そしてこのアメリカの捕鯨船に乗せられて、ハワイまで連れて行かれました。現在と違いまして、当時のアメリカは鯨捕りが盛んでありました。太平洋中をアメリカの捕鯨船が縦横に鯨を捕り回っておりまして。彼らは鯨の肉には全く興味がなく（「鯨の肉は毒だ」と言われていたようです）、もっぱら鯨の油を採取することやっていたわけです。一九世紀アメリカ文学の傑作であるハーマン・メルヴィルの『モービー・ディック（白鯨）』という小説を読みますと、当時の事情がよくわかります。

さてこの無人島は、今では沖の鳥島と呼ばれ、名古屋から南に一、七〇〇キロあたりの太平洋に浮かぶ島です。この島で彼らを救ったアメリカ人は、ウィリアム・ウィットフィールド（William Whitfield）という捕鯨船の船長でありました。この人はマサチューセッツ州のフェアヘイブン（Fairhaven）の出身です。フェアヘイブンは、たくさんの捕鯨船の基地として栄えていました。他の四人はハワイに残りましたが、万次郎はアメリカ本国に行きたいと言ったものですから、船長は万次郎だけ連れて、自分の故郷のフェアヘイブンに帰り、彼を学校へやり、高等学校へも行かせました。このようにして万次郎は、アメリカに行った日本人第一号であります。それどころか、英語を勉強した日本人第一号というべきであろうと思います。

その後万次郎は、ウィットフィールド船長の勧めによりまして、捕鯨船に乗り込み、太平洋で捕鯨に従事し、捕鯨と航海術で腕前を挙げ、一等航海士の資格も得ました。一八四九年にカリフォルニアで金鉱が見つかり、ゴールド・ラッシュが起こりました。万次郎はこの機会に陸へ上がり、カリフォルニアで一年間、金の採掘に従事し、六〇〇ドルを貯めることができました。そこで、この金を帰国費用に充てて、琉球（今の沖縄）行きの船に乗り込みました。一八五〇年に万次郎は、沖縄本島に上陸いたしました。琉球に駐在しておりまして薩摩の役人に事情を話すと、役人は万次郎を鹿児島に送りました。さらに万次郎は長崎へ送られ、幕府直轄の長崎奉行所で詳細に取り調べを受けました。そして一年後の一八五一年に、ようやく故郷の土佐へ帰ることができたのです。これは彼が海上で遭難してからちょうど十年後のことでした。

このようにして万次郎は、不思議な運命によりアメリカで教育を受け、英語を覚え、捕鯨と航海術をマスターした人物として、有名になっていきました。しかし私は、彼が土佐まで帰れたことは非常に幸運であったと考えます。と申しますのは、実は万次郎よりもさらに五十九年前の一七八二年に大嵐で遭難して、ずっと北のアリューシャンまで流されて行った日本人がいたからです。この人は非常な苦労の末、ロシアまで行きました。誰かといえますと、大黒屋（だいくや）光太夫（こうたひふ）という人です。この光太夫は、ロシア人の好意によって十一年後に、何とか北海道まで帰ってきましたが、その後江戸へ送られ、厳しく取り調べを受けた後も、ついに故郷の伊勢に帰ることを許されず、死ぬまでずっと、江戸において軟禁状態で過ごさなければならませんでした。大黒屋光太夫は、そこまで幕府の鎖国政策の過酷さを味わったわけでありました。

話を万次郎に戻します。一八五三年にアメリカのペリー提督が、黒船を率いて浦賀に來航し、強力で開港を迫ります。遂に幕府は、海外で十年間過ごし、英語を自由に話すことのできる日本人である万次郎の力を借りざるを得なくなりました。土佐藩では、幕府に差し出す以上は、漁師の身分ではまずいということで、彼を武士に取り立て、中の浜の出身だから中浜という苗字を与えて、中浜万次郎ということで江戸へ送りました。万次郎は、通訳として幕末の外交に大いに貢献したのであります。万次郎は一八五五年に長崎の軍艦操練所の教授になりました。さらに一八五七年には幕府のお膝元である江戸にできた軍艦教授所で、英語や航海術を教えました。若い頃、新島襄はこの軍艦教授所に入学して、数学や航海術を学びました。したがって万次郎は新島の先生のひとりであったということになります。万次郎は一八六〇年（万延元年）外国奉行新見正興らの遣米使節に通訳として随行しました。この時太平洋は、大時代になりまして、咸臨丸は大揺れに揺れ、艦長の勝海舟は船酔いのために、艦長室に閉じこもったまま出てこなかったといわれています。航海術に自信のある万次郎は、適切に咸臨丸を操縦して事なきを得たのであります。

万次郎は一八六四年から六七年までの三年間、薩摩藩が近代的な海軍を創設しようとしておりました時に、薩摩藩に迎えられまして、その助言者となり、薩摩においても英語と航海術を教えました。その後東京大学の前身であります開成学校の教授として、英語を教え、英語学習のための本を書いたりしながら、晩年を迎えたのであります。

初めて日系アメリカ人となったジョゼフ・ヒコ

次に二人目のヒコであります、ヒコは彦太郎といい、播州の百姓の息子でありました。一八五〇年、江戸見物に行った帰りの船が、遠州灘にさしかかった時、大嵐に遭いまして、その船は自力走行不能に陥り、五十二日間海上を漂流した結果、十六人の乗組員共々アメリカ船に救助されて、サンフランシスコに連れて行かれたのであります。ちょうどペリー提督の日本遠征の計画が起こりつつあり、こうして不可抗力により漂流民となった日本人を、ペリー提督が日本に返すことにしようということで、いったんはマカオまで漂流民たちは連れて行かれたのでありますが、方針が変わりまして、漂流民の返却は開国後の問題にしようということになり、再び彼らはサンフランシスコに連れて行かれました。ヒコはサンフランシスコで税関長であったサンダース（B. C. Sanders）という人に出くわし、サンダースから見込まれ、一八五二年にメアリランド州のボルティモア（Baltimore）に行きました。西海岸のサンフランシスコから東海岸のボルティモアへは、鉄道で行ったのですが、初めて鉄道に乗ったヒコは非常に驚き、印象深い旅をしたと自分の自叙伝に書いております。一八五四年にボルティモアのミッション・スクールに通わせてもらうことになり、三年間通いました。そしてその年の十月三十日カトリックの聖母マリア大聖堂で洗礼を受けました。その時のカトリックの習慣によりまして、洗礼名としてジョゼフ（Joseph）という名を彼は与えられたのであります。ローマ・カトリックや聖公会では洗礼名というのをもらうわけでありませう。そこで彼は、ジョゼフ・ヒコと名乗るようになったわけです。ヒコはHicoとしていたのですが、アメリカ人はどうもこれをハイコーと呼ぶので、それでは困るということで、ヒコと呼んでもらうためにHecoにしたそうです。

偶然ではありますが、新島襄の名前もジョゼフです。しかし新島の場合は、洗礼の際に与えられた洗礼名ではありません。新島は上海からボストンに向かうアメリカの商船ワイルド・ローヴァー号に乗っていた時に、ホラス・テイラー船長から大変かわいがられました。アメリカ人である船長は、彼を呼ぶのにニシジマとかシメタとか、とても発音できませんので、「今日から君をジョーと呼ぶ」と宣言したのであります。Joeです。そこで彼は自分がジョーだということにしまして、後に漢字で私たちが知っている襄の字を当てることにしたのであります。ジョーはジョゼフの愛称でありましたから、新島は自分で英語で署名する場合には、ジョゼフ・ハーディー・ニシジマと綴るようになったのであります。ただジョゼフ・新島とジョゼフ・ヒコが異なる重要な点は、ヒコが一八五八年にアメリカに帰化いたしまして、アメリカ人になったことです。新島自身も一八七四年に十年ぶりに日本へ帰る時に、まだキリスト教の禁教の高札が撤去されたばかりであり、クリスチャンとして帰るのは危険であるということで、アメリカに帰化してアメリカの市民として、日本に行つてはどうかというふうに勧める人がいたのですが、新島はよく考えてその勧めを断りまして、日本人として帰国する道を選びました。これは非常に意味深いことだと思ひます。

ヒコに話を戻しますと、一八五四年十一月に再びサンフランシスコへ移りまして、そこでもカトリック系の学校に通います。それは後にサンフランシスコ大学となった学校であります。ところがスポンサーであったサンダースが破産してしまったために、それ以上勉強を続けることができなくなり、ヒコはいろいろな仕事を次から次へとすることになります。ヒコは日系米人第一号となった人ですが、やはり日本に帰りたいくたまたまな機会をもらえ、帰国しようといいたしました。そしてようやく中国の上海まで来ると、彼は幸運にも初代駐日アメリカ公使として、今から日本へ行くこうとしていたタウンゼント・ハリス（Townsend Harris）に出くわしました。ハリスはヒコを通訳として雇いました。遭難後九年ぶりにヒコは日本の長崎に到着いたしました。そして神奈川のアメリカ領事館におきまして、幕末の外交交渉を手伝うわけであります。しかしハリスのために働いた期間はわずか半年余りであつたと考えられています。ヒコはアメリカ人である、しかも領事館に勤める人であるということで、ヒコの場合、踏み絵は要求されませんでした。しかし万次郎は踏み絵をやらされております。ヒコは一八六〇年に横浜で貿易会社を始めました。翌年アメリカへ帰り、南北戦争に巻き込まれて、一度はアメリカ南部の人ということで、ボルティモアのあるメアリランド州は南部でしたから、彼は北軍の憲兵隊に拘引されたことがあります。

ヒコは一九世紀アメリカの三人の大統領と会った極めて珍しい日本人であります。すなわち第十四代の大統領フランクリン・ピアスに一八五三年に会見しております。これは彼のスポンサーであったサンフランシスコの税関長サンダースが大統領と親しかったものですから、ヒコを連れて行ったわけですから。このときピアス大統領はヒコを見て「よさそうな青年である。どうだ、ひとつウエスト・ポイント陸軍士官学校に入らないか。私が推薦してあげるから」と言ったそうですが、サンダース氏が「ヒコを陸軍の学校に入れて軍人にするつもりはありません」と断ったそうです。第十五代のジェームズ・ブキャナン大統領には、それから四年後に会っておりますし、第十六代のエイブラハム・リンカーン大統領にも会っております。

ヒコはその後、再び上海を経由して横浜に帰り、またもや貿易に従事するとともに、日本で最初の新聞である『海外新聞』を発刊しております。これは最初は手書きの新聞で、のちには木版刷りになりました。これは海外からヒコが取り寄せていた新聞の中から、面白そうな記事を日本語に訳して載せた新聞です。第十八号からは、新機軸を打ち出して、その新聞にアメリカの歴史を連載し、それに加えて旧約聖書の創世記を載せたのであります。本当にこの時期、まだキリスト教が禁教であつた時期に、創世記を彼なりに訳して天地創造の物語から始めて載せた。これは幕府にみづから大問題になったはずであります。一八六五年七月には、この『海外新聞』にリンカーン大統領が暗殺されたという速報を載せました。『海外新聞』は二年目の二十六号で廃刊になっております。彼はしばらく長崎に行ったりして、休刊したりしておりますので、毎日発行の新聞ではなく、のんびり間を置いて出した新聞です。しかし日本における最初の近代的な新聞であります。

新島襄は、おそらくヒコと会ったことはないはずですが。それでも新島が一八六七年四月十一日付でアンドーヴァーから、ヒコに宛てて書いた簡単な英文の手紙が残っています。その内容は、新島の父親の民治から、横浜のヒコに依頼があつた場合には、父の手紙を横浜に住んでいる宣教師のブラウンか、他の宣教師に渡して、自分宛てに転送してくれるように依頼してほしいというものでありました。つまり新島は、ヒコに太平洋とアメリカ大陸を隔てて、親子間の手紙の仲介役を頼んだのでありました。何らかのつてで、新島は横浜には貿易商を営むジョゼフ・ヒコというアメリカ市民権を持つ日本人がいることを、知っていたわけであります。

ヒコは一八七二年（明治五年）に明治政府の大蔵省に入り、二年間勤務しております。近代化しようとしていた日本では、外国の例にならって国立銀行という制度を創始する必要があることを、政府が先ず理解する必要があつたのです。ヒコはひとりのお雇い外国人であるイギリス人とともに「国立銀行条例」を編纂しています。ヒコは後に苗字に浜田を採用して浜田彦造と名乗っております。この浜田というのは彼の母親の再婚先の名前です。彼は幕末の一八六三年に日本語の自伝『漂流記』を出版しました。晩年には英語の自伝The Narrative of a Japanese(1892-95)を丸善から出版しています。これの翻訳も出ております。私たちはこの詳しい自叙伝のおかげで、ジョゼフ・ヒコの興味深い生涯を、比較的詳しく知ることができるわけであります。

三人の共通点＝スポンサーとの出会い

以上中浜万次郎と浜田彦造という二人の日本人漂流者のたどった生涯の軌跡を概観してまいりました。最初にも申しましたように、万次郎とヒコとは自分の意志で渡米したのではなくて、大嵐にあって漂流し、たまたまアメリカ船に助けられてアメリカに連れて行かれた人びとでした。それに対して新島襄は、自分で決意し、自分で運命を切り開いていった人でした。新島は渡米以降、江戸にいる自分の弟に手紙を書いて、どうか自分に代わって父と母を大事にしてほしい、そして絶対に兄貴のまねをして海外脱出を図ってはならないと述べております。しかしこれはちょっと新島の勝手ではないでしょうか。兄貴はこういう大冒険をやった。しかし弟よ、お前はそんなことをしてはいけない、と言っているのですから。新島の弟の双六は非常な秀才だったといわれております。彼は確かに兄のまねをして密航をしたりはしませんでした。残念ながら肺結核にかかり、若くして亡くなり、一八七四年に帰国した新島襄との対面を果たせずに、終わったのであります。

さてこれから、万次郎とヒコと新島襄を比較していきたいと思います。三人に共通している第一の点は、それぞれが幸運にもいいスポンサーと出会っていることです。万次郎の場合はウィットフィールドという捕鯨船の船長。ヒコの場合は、サンダースというサンフランシスコの税関長で、後にロシアに派遣されて駐露米国公使を務めた人です。そして新島の場合は、アルフィーアス・ハーディー（Alpheus Hardy）。ハーディーはボストンのクリスチャン実業家であります。ではこういうふうにして一九世紀にアメリカへ行った人は、この三人のように、すべていいスポンサーに出くわしたかということ、そういうわけではないのです。スポンサーに出会えなくて塗炭の苦しみをなめた例も少なくありません。一例だけ挙げてみますと、同志社の姉妹校であります梅花女学校の創立者澤山（さわやま）保羅（ぼろう）ですが、澤山は新島より少し遅れて、アメリカに留学いたしました。澤山にはいいスポンサーがありませんでした。そのために経済的に非常に苦しみ、その留学は実に悲惨でありました。彼が肺結核にかかって比較的早く亡くなったことの遠因は、アメリカにおける悲惨な留学生生活にあったのではないかと、私は思っております。澤山保羅は三十五歳で亡くなっています。

スポンサーに出くわす、出くわさないということは、純然たる運不運の問題でしょうか。私は自分の経験からして、どうもそこには、その人物がどのような性格の持ち主であるかが、多少なりともからんでくると思うのです。あまりにもプライドの高い留学生がやってきた場合、誰がわざわざその人のスポンサーになって、支援してあげる気になるでしょうか。ことにその留学生が、日本の誇り高い武士であつた場合、その武士としての誇りが、スポンサーとの出会いの妨げになる場合があつたと想像できます。私は澤山保羅にスポンサーがつかなかったことには、そのような事情があつたかもしれないと想像しております。しかしこのことをあまり強調しますと、梅花の先生たちから何を言うかと叱られそうなので、これ以上は言いません。あくまで私の想像です。万次郎やヒコの場合、武士ではありませんでした。ですから彼らが武士的プライドを持っていなかったことが、彼らにとって幸いであつたと私は考えております。もちろん三人は三人とも正直で、きびきびした人であり、勉強好きで英語を必死で学ぼうとした人であり、そして恩恵を受けたことに対して、いつも感謝の念を忘れたかった。そういう日本人のいい性格が、万次郎にもヒコにも新島にも共通してあつたと思います。それはたとえば新島襄に関して、アーモスト大学のシーラー教授宛てにプリントというアンドーヴァー神学校の学生が推薦状を書いてありますが、その推薦状を読んでもみると、新島の美点が克明に描かれております。そのような美点はある程度まで万次郎やヒコにもあてはまるのではないかと私は思っています。

新島の武士としてのプライド

では武士の子であつた新島は、武士のプライドをどのように処理したのかという問題です。この点に関して新島には面白いエピソードがあります。これは函館で乗船したベルリン号での話です。舟の中に一人西洋人の船客がおりました。大変気まぐれな人で、親切であるかと思うと、とても乱暴になりました。気が向くと新島に英語を教えてくれました。ベルリン号が紀伊半島の南と思われるあたりを航行中、新島はこの西洋人に英語の単語を習つておりました。ところが新島の発音がうまくできないので、怒声を発し、鼻とあごに手をかけて口を開けさせて「D oと言え」と言ったそうです。また別の日に、この西洋人は、新島に何かを命令したのですが、言っていることがさっぱり分からなかったで、新島は何もできなくて、ぼかんとしていた。かんしゃくを起こした西洋人は、新島をぶん殴つたのであります。その出来事を、彼の自伝から私の訳で引用してみたいと思います。

「その時は怒りが心頭に発し、復讐の念にかられて、私の日本刀を求めて自室にかけ込んだ。刀をつかみ、部屋から飛び出そうとした時、たちまちひとつの考えが湧いた。そのような行動をとる前によく考えなければならない、と。そこでベッドの上に腰をおろして、心の中に言った。これは取るに足らぬ事柄ではないか。恐らく私はこの先もつきびしい試練に遭うことだろう。今ここでこれしきのものを恐ろがることができなければ、大試練にどうやって対処できようか？ 私は自分の辛抱のなさを恥じ、今後はどのようなことがあっても刀に手をかけまいと決意した」。

新島はこうにして自分をコントロールすることに成功しました。もしも、その時に自己制御できず、その無礼な西洋人を切りつけていたら、当然彼は上海で船を降ろされ、アメリカに行くことはできず、したがって同志社も建てられていなかったはずです。

プライドの問題というのは実に微妙です。そして実は非常に大きな問題であります。後年新島襄と澤山保羅は共に同一の陣営、組合教会に属するキリスト教の牧師として、アメリカの宣教団体から寄せられた伝道資金に対して、対照的な考え方をするようになります。新島はアメリカからきた金を、伝道のために使うことに何の躊躇も感じませんでした。それに反して、澤山は日本の伝道には、日本人信者の捧げた金でまかなうべきであって、外国の金は拒否すべきだと考えたのでありました。独立心旺盛な内村鑑三も、類似的考え方をしておりまして、そのために内村鑑三は、あちらこちらの同僚のクリスチャンと衝突してきました。しかしながら同志社の歴史を調べてみますと、新島を支援してきたアメリカン・ボードというミッション団体の財政支援なしには、同志社の最初の二十年間は到底維持できなかったことは明白なことであります。

第二の共通点＝キリスト教との関わり

万次郎、ヒコ、新島における第二の共通点は、彼ら三人ともアメリカで何らかの仕方でキリスト教と関わったことです。その点では三人の間で、ニュアンスの相違が顕著です。まず万次郎の場合です。ウィットフィールド船長が、彼を自分の故郷であるマサチューセッツ州のフェアハイブンに連れて行きました。マサチューセッツ州というのは、一七世紀にイギリスから渡ってきたピューリタンたちが建設した植民地でしたから、そのキリスト教は、元来カルヴァンの宗教改革の影響を受けた厳しいタイプのキリスト教でした。ピューリタンたちが、マサチューセッツ州で形成してきたキリスト教会は、普通会衆派教会と呼ばれています。ウィットフィールド船長が、十四、五歳でありました万次郎少年を会衆派教会へ連れて行き、その日曜学校へ入れました。その教会では、万次郎は白人でないから、黒人のクラスに入れられたのであります。船長は、この差別に怒りまして、万次郎を別の会衆派教会へ連れて行きました。それでも同じ扱いを受けました。そこで船長は、会衆派教会を見限り、ユニテリアンの教会へ連れて行きました。ユニテリアンでは、万次郎を差別することなく一般の組に入れました。このことを契機としてウィットフィールド船長は、会衆派教会を離れてユニテリアン教会に移ったのであります。ただそのため万次郎自身が、ユニテリアンの信仰を持つようになったかどうか、そのところは確かではありません。万次郎は帰国後、長崎で踏み絵をさせられたとき、ちゃんと踏んだので、故郷の土佐に帰ることができたのであります。

ジョゼフ・ヒコは既に述べたように、ローマ・カトリック教徒として洗礼を受けました。サンダーズが、ヒコを連れて行ったメアリランド州は、元来ローマ・カトリックの勢力の強いところであります。徳川幕府が鎖国政策をとったのは、何よりもカトリックの日本浸透を防衛するためでありました。ヒコは帰化してアメリカ人になっておりましたので、長崎で踏み絵をさせられることはありませんでした。ヒコは横浜時代に横浜天主堂のP・B・S・ジラルド司祭と親交を結びます。プロテスタントの宣教師たちJ・C・ハップバーンとS・R・ブラウンらの宿所作りの世話もしています。ですから新島はアメリカのフィリップス・アカデミー留学中に、ヒコに手紙を書きまして、父親の手紙をヒコからブラウン宣教師に頼んで郵送してもらうことができたのであります。ヒコは横浜で発行しておりました『海外新聞』に、旧約聖書の冒頭にある創世記を連載しました。それは、天地創造の物語、アダムとイブが禁断の木の実を食べ楽園から追放された物語、アブラハム、イサクそしてヤコブとイスラエル十二部族の起源を説明する物語であります。そういうものの翻訳を連載したのは、やはりクリスチャンとしてのヒコの一種の啓蒙活動であったということができます。

新島の国外脱出の動機とは

私は、今日のお話を若い日の新島襄が、どのような動機から、決死の覚悟で国外脱出を図ったかについて、私のコメントを申し上げることで終わりたいと思います。現在日本人が、アメリカに行くことは実に簡単です。関空からであろうと成田空港からであろうと、十二、三時間ジェット機で飛べば、アメリカのサンフランシスコであれ、シカゴであれ、ニューヨークであれ到着いたします。アメリカにいる人と、簡単に電話で通話できますし、Eメールを使えば瞬時にして、メールのやり取りができます。ですから日本がまだ鎖国していたころ、国家の厳しい掟を破ってまでアメリカに行った若者の心境を、今の人びとは、もはや正しくつかむことは不可能になっているのではないかという気がします。現在新島の大冒険を何かに例えたとすれば、それは宇宙ロケットに乗って、宇宙に打ち上げられることに匹敵することではなかったかと考えております。

新島襄はどのような動機から、どのような覚悟で国外脱出を図ったのでしょうか？ 新島は江戸で若い頃、友人と聖書の勉強をこっそりしていたということが現在では知られております。それは新島の年上の友人である津田仙が書き残したものにでてくるわけです。新島襄や杉田（すぎた）廉卿（れんけい）などと一緒に、聖書を読んだと書かれています。そういう江戸での聖書の学びから、新島が得たことはいろいろあったかと思いますが、特に重要なことは彼が「天父」という言葉を発見したことです。なぜ「天父」の発見が、重要であるかといえますと、新島は若い頃やはり儒教の教えに従って訓練されておまして、しかも生来彼は親孝行な息子であったのです。海外に脱出することは親を困らせ、悲しませることだということが痛いほどわかっていました。どうやったら自分の意志をまっとうできるか。そして親を悲しませずに行けるか。そんなことはできないわけですね。この矛盾に悩んでいた時に「天父」という言葉がひらめいたのであります。すなわち私は天の父によって作られた。この机も天の父によって造られた木から、大工によって作られた。自分の親もやはり天の父によって造られたのだ。すると自分が仕えなければならないのは、自分の親よりもさらに第一義的には天の御父なのだ。天父に対する忠誠心は、親に対する忠誠心よりも上なのだという、この原則を彼は悟ったのです。「天父」という言葉は江戸に住んでいて幕藩体制の封建制度の中で、逼塞状態にあった新島を解放する原理になったわけです。そういうふうにして新島は、キリスト教との接触により、自分を解放することができた人でありました。このことは、なかなか理解しにくいのですが、私は新島襄における面白いポイントは、そこにあると考えています。そういう意味での天父の発見ということは、万次郎の場合にも、ヒコの場合にもなかったように思います。これは新島が一種の実存的な発見をしたということになると思います。

新島がこのようにして志を遂げたということ、そして、もうひとつ、一七世紀から一八世紀にかけて活躍いたしましたイギリスのダニエル・デフォアという小説家がいるのですが、そのデフォアの『ロビンソン・クルーソー』がすでにオランダ訳を通して、日本語に訳されたのですね。その『ロビンソン・クルーソー』を読んだ時に、非常に彼は感動しました。ロビンソン・クルーソーというのは、お父さんから「お前はおとなしくおれの後を継いでくれ。そうすれば、そこそこの収入はあるし、お前の将来も幸福が約束されているのだ」と、懇々と言われていたのに、家にじっとしていることができない。このイギリスの外に何があるか、どうしても見てきたいという希望が、沸々と湧いてきて、ある日家出して舟に乗ってしまったわけです。その後ロビンソンは南米ブラジルに行くのですが、そしてブラジルから今度はまた航海して、アフリカに黒人奴隷を買いに行こうとするその航海の途中で嵐に遭い、船が沈没し、彼一人が無人島にたどり着くのです。そういう物語でありまして、新島襄はロビンソンが実在の人物だと思って読んでいたのです。ロビンソン・クルーソーの伝記を読んだつもりでいたのです。その海外の国々を見てきたいという熱望は、新島襄自身が感じたものでありました。新島襄は自分をロビンソン・クルーソーと一体化して考えたわけです。伊藤彌彦先生の本を見ますと、この時の新島襄のことを「君は行くのか」という歌を引用して「そんなにしてまで君は行くのか」というふうに描写して、なんとこれは新島七五三太にあてはまることかと、書いておられます。私はまさにそうだと思います。

うまく申しあげられたかどうかはわかりませんが、今日はジョン万次郎とジョゼフ・ヒコと新島襄の三人を比較対比することで、それぞれの特色に少しでも光を当てることができれば幸いだと思っています。ご清聴ありがとうございました。

二〇〇五年四月十三日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録